

## 子宮がん検診（施設）

### 動 向

平成14年度における子宮がん施設検診受診者は、頸がん15,602名（前年度比446名減）、体がん2,560名（前年度比329名減）であった。受診者数は平成10年度から平成13年度まで微増傾向にあったが、減少に転じた。

健康保険組合の財政逼迫による主婦検診事業の縮小や受診者負担金の増大など、婦人科検診を受診する環境は年々悪くなってきているが、これに対して当協会では個人に対する受診勧奨を継続的に行ってきた。

平成14年度は、前年度に引き続いて頸部がん検診における30歳未満の受診者の増加（前年比99名増で44%の増加）が目立つ。また、30歳代でも昨年より94名増の2,240名と、いわゆる“若年層”の受診者は増加傾向にある。一方、40歳代の受診者は、前年度より399名減少（一昨年度は333名減少）し2年連続して300名以上の減少となったほか、50歳代でも前年度より226名の減少となり、若年層とは対照的な結果となった。

### 子宮頸がん検診

平成14年度の子宮頸がん検診受診者数は15,602名、前年度より446名減であった。このうち初診者数は4,271名（27.4%）であって、昨年度より3.4%の増であった。

年齢階級別に総受診者数に対する割合をみると、50歳代が5,816名（37.3%）で相変わらず最も多いが、次いで40歳代4,301名（26.7%）、60歳代2,481名（15.9%）、30歳代2,240名（14.4%）、70歳代441名（2.8%）、20歳代323名（2.1%）の順であった。平成13年度との比較では、20歳代、30歳代においては初診者数、再診者数共に増加、40歳代以上では、総数、再診者数は減少したが初診者数はすべての年代で増加した。がんの若年化傾向が指摘される中、若年者への受診勧奨の努力が反映して若い年代層のみならず、中高年層でも新規受診への誘導となった頸元なら幸いである。

細胞診クラス a以上のものは135名、受診者の0.9%で、昨年度と同率であった。

頸がん発見数は13名（前年度15名）発見率0.08%（前年度0.09%）で変化はみられなかった。内訳は、クラス aからは頸がん0名、クラス bから頸がん0期1名、a期1名、クラス cから頸がん0期3名、腺がん2名、クラス dから頸がん0期4名、a期1名、腺が

ん1名で、腺がんが3名発見された。この他、クラス再検としたもの188名であるが、これからのがんの発見はなかった。

異形成発見数は93名（昨年度92名）発見率0.60%（前年度0.57%）で著変はなかった。内訳は、軽度異形成79名、中等度異形成8名、高度異形成6名であって、軽度異形成の比率が高かった。細胞診成績からは、クラス aから66名、クラス bから5名、が発見されているが、クラス cから中等度異形成1名、高度異形成1名、クラス dから高度異形成1名、クラス e再検とした188名から19名の異形成が発見された。

### 子宮体がん検診

子宮頸がん検診受診者のうち子宮体がん検診をうけたものは2,560名（前年度2,889名）で頸がん受診者の16.4%であった。体がん検診対象者の選び方は、老人保健法による健康診査マニュアルに準拠しているが、健康保険組合によって対応は異なっている。2,560名の対象者のうち頸管狭窄などの理由で吸引チューブが挿入できず、経腔超音波法による内膜厚測定に変更したものの（採取不能例）97名（3.8%）を除いては増淵式吸引法による内膜細胞診を施行した。

内膜細胞診の結果、疑陽性11名、陽性2名が検出され、精検の結果0期体がん1名、a期1名、b期1名、c期以上1名、内膜増殖症1名が発見された。（昨年度c期1名のみ）体がん発見数の増加が著しい。内膜の萎縮、出血等の原因で細胞採取量が不十分のため判定不能となったものは85例（3.3%）で前年度101例に比べて減少した。

### 卵巣がん検診

一次検診で内診の結果異常を触知したものと希望者に対し、経腔超音波法を主体とし腫瘍マーカーを併用した卵巣クリニックを開設している。平成14年度の受診者は346名（前年度219名）で受診希望者の増加が著しい。その中から卵巣がん1名、卵巣のう腫などが10名発見された。（前年度、卵巣のう腫3名）

関係の集計表は89～91頁に掲載